

平成25年度 第3回 桑名市子ども・子育て会議 議事録

日 時	平成25年11月27日(水) 午後1時から午後3時30分ごろ
場 所	市民会館 大会議室(桑名市中央町3丁目20番地)
出席委員	伊藤香、伊藤直和、稲垣陽子、大橋了子、奥田聖人、加藤隆明、柴田幸男、 下間賢了、高橋恵美子、津田浩二、中谷直子、野口典子(◎)、 濱内洋孝、松岡典子(○)、松岡初文、水谷秀史、水谷美保、横山悦子、 渡部美紀子(敬称略、五十音順)(◎:委員長、○:副委員長) ※松岡初文委員・渡部美紀子委員は所用により途中退席
傍聴人数	9名
会議次第	<ol style="list-style-type: none">1. 開会2. 報告<ol style="list-style-type: none">(1) 子ども・子育て支援に関するヒアリング・ワークショップの実施報告①(資料1)(2) 桑名市における子ども・子育て支援施策の現状の報告(資料2)(3) その他3. 議事<ol style="list-style-type: none">(1) 教育・保育提供区域の設定について【グループワーク】(資料3)4. その他5. 閉会

1. 開会

2. 報告

(1) 子ども・子育て支援に関するヒアリング・ワークショップの実施報告①

※ 資料に基づき事務局説明

(事務局)

ヒアリング・ワークショップにご参加いただいた柴田委員および横山委員に、簡単にご感想をお願いしたい。

(柴田委員)

貴重な体験をさせていただいて良かったと思っている。本日の資料には記載されていないが、このプログラムに参加している子どもたちのきっかけは、職場体験で幼稚園や保育園に行ったことがあるというのが多かった。中学校のPTAで同じようなヒアリングをしているが、職場体験で行った中学2年生の感想は、“子どもたちはかわいい”“好き”といった程度だが、今回は高校2年生だったので、資料よりももっと臨場感があり、将来的なイメージを具体的にしている。女子は「お母さんになったら」というのをイメージしやすいが、男子は「お父さんになったら」というよりも、「どんな職業に付こう」「自分は大工さんになりたい」とか、そういうことを言っていた。子どもたちと接することによって、自分が家庭を持ったらどうしようと具体的なイメージができるようになってるのが非常に良かったと思う。中には子ども会で小学校1年の頃から知っている子たちがたくさんいたので、その子たちが大きくなって成長して立派になったなあといううれしい気持ちもあったが、こういう体験というのは、他の学校にもぜひフィードバックしていただき、県の教育委員会から高校のカリキュラムの選択でもっと広げていただければ良いと思っている。子育て支援とは違う話だが、貴重な体験ができたことに感謝したい。

(野口委員長)

多少大きくなった子どもたちの子育て支援も大切なので、将来、進路ということが、職業選択、家庭生活や地域生活につながっていくと思う。今の子どもたちは、映像の世界は得意だが、実体験というのは苦手な子が多いので、そういう機会が必要だと思う。

(横山委員)

私にとっても良い機会となったことに感謝したい。印象として、初対面の人に率直に意見できる子どもが多かった。子どもと接する授業をしたり、先生方がおそらく「親になったらどうするの」という問い掛けをしているのではないかと思った。親になって初

めてどうしようとするのではなく、親になる前から、家族・子どもをもった時にどうしたら良いのかを考える機会があるということは良かったと思う。

(野口委員長)

ヒアリング形式の話を的確に再現することは難しいので、資料のまとめは抽象化してしまっているが、子どもたちの意見等も含めて、何かご意見や気付いた点等があればご発言をお願いしたい。

私が意外に感じたのは、結婚したいと考える子どもが多いこと。結婚願望が9割を超えているので、結婚、そして親になるというイメージを普通に持ち続けているんだなあと思った。しかし、心配な点は、桑名市に住み続けたいと思う割合が低いこと。基数が少ないので何とも言えないが、少ないのであればこそ、住み続けたいと思う割合が高くなってほしいと思う。桑名で仕事を持って、家庭を持って、親になるというイメージが、子どもたちに湧いてくると良いと思う。

(松岡副委員長)

マタニティセミナーの参加者について、対象人数が27人と記載されているが、27人なのか、27組なのか。

(事務局)

参加者は、1人だけでとか、家族と一緒にとか色々な組み合わせがあったので、妊婦27人+ α とご理解いただきたい。

(松岡副委員長)

父親の子育てへの参加促進が叫ばれているご時世なので、この27人+ α に父親が含まれているのか気になった。アンケートの回答者は、27人の妊婦と解釈して良いか。

(事務局)

夫婦で参加した人の回答には、父親の意見も含まれている。夫婦で一緒にご回答いただいた。

(濱内委員)

ヒアリング・ワークショップは非常に良いと思う。中高生の声を聞くことは、他市町ではあまりやっていない。先程、女性から手紙を渡された。内容は、「桑名市の子ども支援のイメージ図にPTAやサークルはあるけど、保護者会は記載されていません。私は、働く親は桑名市の支援から置き去りにされているように感じています。保育所の保護者をこのサークルに加えてはどうかと市役所の方に聞くと、『働いている親御さんには、なるべくご負担を掛けたくない』と言われました」というもの。この女性が言いたいのは、

公立保育所の働いている親の声を、紙のニーズ調査だけではなく、ヒアリングとして拾い上げてほしいということ。市民公募委員のワークショップの結果をみると、紙では拾いきれない子育ての悩み等が出ていると思う。事務局には、保護者会に対してヒアリングを実施するよう検討してほしい。

(事務局)

貴重なご意見に感謝したい。市民公募委員のヒアリングによって、保護者・保育者のご意見を頂戴しているので、濱内委員のご意見は持ち帰って検討したい。

(濱内委員)

特に経費が掛かることではないので、前向きに検討してほしい。2月には子ども家庭課の主幹と公立保育所の保護者交流会も企画されているが、時期的に遅いのと、それはあくまで保護者会同士の交流の場なので、そういうことも含めてニーズ調査に加えていただきたい。

(野口委員長)

ヒアリング・ワークショップは、紙ベースの調査では拾いきれない具体的な声を拾い上げていくことを主旨としているので、そういうご提案は良いと思う。

今回は中間報告であり、事務局は丁寧に拾ってまとめてくれているが、聞いたままの生データの方が良いと思う。解釈の仕方によっては主旨が異なるものも多いと思うので、特に分類する必要もないかも知れない。アンケート調査と違い、聞いたことを再現する作業はなかなか大変だとは思いますが、聞いた内容をなるべく忠実に再現していただいた方が良いと思う。ヒアリング・ワークショップは今後も実施されるので、機会があれば委員の皆さんにもご参加いただきたい。それでは、次の報告事項に移る。

(2) 桑名市における子ども・子育て支援施策の現状の報告

※ 資料に基づき事務局説明

(野口委員長)

桑名市の子どもの現状と、次世代育成支援後期行動計画の重点施策の進捗状況についてご報告いただいた。ご意見等はあるか。

(水谷秀史委員)

8頁の地域型保育事業の概要は、あくまでも今やっているということではないのか。将来に向けてのということで、やっています事業の中で1頁だけ今やっていない事業、こんなこともできそうだなという展望を書いていたということの良いか。

(事務局)

はい。資料に記載のとおり、参考とご理解いただきたい。

(水谷秀史委員)

もし結果としての報告であるとするならば、この頁は不要だったと解釈しておく。

12頁について、私は桑名北高校の評議員だが、職業体験だと思う。そして、「みらい」という科目があり、これは職業体験として文部科学省から昔補助金を受けてやっていたので、子育ての一環のプログラムではないと思うがどうか。

(事務局)

桑名北高校の狙いとしては、コミュニケーション能力を高めることを目的として始められた。市としては、次世代育成支援行動計画の中の「次代の親づくり」の主旨とマッチングしていたので、互いに発展的に協力してきた。

(水谷秀史委員)

補助金を受けていなければおそらくいいと思うが、その辺りをもう一度精査していただく必要があると思う。評議員もそこまで細かいお金の出所まではわかっていないので、職業体験ですと定義されているのが、ついでだ、いいんや、ここに入れてやれということとでここに上がってきたとするならば、相応しくない情報をここに持ってきたということになるので、ぜひ裏付けを取っていただくようお願いしたい。

(野口委員長)

次世代育成支援行動計画の前期からこのパターンでやってきて、ご報告いただいているがよろしいか。他の高校や保育所に広がっていかないのが残念だが、高校生と保育園児の交流事業という位置付けで続けられてきた。

(水谷秀史委員)

繰り返すが、どこにもコンフリクトがなければそれで結構。私が知っている限りではそういうことだったので、当時の教員が「みらい」という科目を立ち上げ、三重県教育委員会の指導の下、職業体験という名で行っていたので、何でも入れていいんだということに入っているとすると、けしからんなと思った。

(事務局)

1度確認する。

(下間委員)

9頁の延長保育事業の状況について、以前にもお話したことがあるが、11時間という保育園の開所時間は、子育てをする親にとっては都合が良いかも知れないが、そこに預

けられている子どもは、極端に言えば11時間保育園にいるということになる。この資料をみると、私には子どもの悲鳴が聞こえてくる。家庭を支えるというのは大切なことだが、保育園の園長として、11時間も子どもを保育園に預けることが本当に家庭を支えることになるのか、家庭にとって大切なのかも考えてほしい。施策として延長保育事業の実績をみれば、素晴らしいと感じられるのかも知れない。しかし、子どもは発言できない。子どもが1人ずつ帰っていく中、自分の親が迎えに来るまで淋しい想いをしながら待っていなければならない。朝は、まだ眠いうちに、ろくに朝食も食べさせられないまま保育園に預けられて、また1日24時間のうちの11時間を保育園で過ごすことになり、家に帰れば寝るだけという生活が繰り返される。そういうことが本当に子育て家庭を支えているのか、大切な事業と言えるのか、委員の皆さんの心の中に留めた上で議論を進めてほしいと思う。

(水谷秀史委員)

下間委員のおっしゃるように、子ども・子育て支援法自体が1つの歪みを持っていると私は考えている。この法案自体は、親と子どもを離そう、離そうとする施策。なので、11時間ですよというふうにここに表れてきたということは、これは短縮せないかんじゃないかというふうに理解すべきだと思う。私たちは教育を考えていくときに、親と子どもをくっつけよう、くっつけようと思うのが我々の想いであって、離そう、離そうとする現在の方向性については、大きな異議を唱えたい。

(野口委員長)

先程、保護者会の親にもヒアリングをしてほしいという意見があり、また子どもは声にするのが難しいとおっしゃるのは1つのご意見と思うが、まずは、子育ての現状について、現に子育てをしている方々のご意見を踏まえながら議論していきたい。これは施策の現状なので、ここでは最大11時間開所しているという意味で示されている。延長保育そのものがどういう意味を持つかについては、今後議論する宿題にしておきたい。

(濱内委員)

下間・水谷両委員の発言は、極論を言えば、保育園に預けられている子どもは幸せではないというふうに受け取れる。11時間も預けられている子どもは私も不幸だと思う。子どもの気持ちを考えれば、最後の1人に残る子どもはかわいそうだと思う。ただ、そうせざるを得ない家庭があることは、当然知っておいてもらわなければいけない。例えば、母子家庭で、身寄りがなくて、保育園だけが唯一の生活のセイフティネットで、そこで預かってもらえなければ働き口がなく、生きていけなくなる家庭もあるかも知れな

い。保育園に長時間預けられている子どもはかわいそうだというご意見だったが、まったくそんなことはないと思う。家庭に帰ってから、短時間であっても食事やお風呂などで密に関わる時間が持てれば、我家は共働き家庭だが、子どもたちは幸せに健康に育っている。自慢ではないが、小学生になってからも伸び伸びとしている。共働き家庭の子どもが本当に不幸だったか、昔でいう所の3歳児神話だが、それは関係ないと思う。それを保護者の立場として言っておきたい。子育てをしないネグレクトの親に育てられるよりは、第三者であっても子育てをしてくれる人にみてもらえた方が、温かい子どもに育つことはわかりきっている。議論がずれてしまったが、延長保育事業がけしからんという議論にはしてほしくない。

(水谷秀史委員)

今のそれは、量と質という課題を持って議論すべきと捉えるので、延長保育のすべてを私は否定するものではない。

(柴田委員)

子どもを想う親の気持ちは大事だが、ここで議論するのであれば、その11時間をいかに充実させるか、11時間中に親と子どもをくっつけるかを前向きに考えたい。昼休みにスカイプで親子で会話するとか。そういう前向きに取り組めるものを何か具体的に提案していきたい。

(野口委員長)

前回の次世代育成支援の会議でも、子育てだけを議論することは難しく、親の就労もペアで考えていかないと、やはり子育て環境はうまくいかない。親の就労や通勤等々に関わる生活時間から、子育ての問題を考えましょうという議論を重ねてきた。なかなか結論が出ることはないし、保育内容の議論も必要だし、今日の議題にはないが、今後のテーマとして検討していくことになる。その際に、率直な意見交換をしていきたい。

今日は、とりあえず桑名市が実施している重点施策に関する事業の現状を報告していただいた。重点項目以外の詳細については、またの機会に報告させていただく。

(津田委員)

ヒアリング・ワークショップの結果について、育児休業を「3年」取得したいと答えた人が多かったのは意外だった。働いている母親は、本当は子どもと一緒にいる時間を大切に、ある程度育ってから仕事に復帰したいと考える人が多いのかなと感じた。資料2の5頁に保育園・幼稚園の在籍人数が記載されているが、私立幼稚園の2歳児は「一」となっている。しかし、私立幼稚園には、満3歳児を預かる制度があり、実際には2歳

児の学年になる。平成25年5月1日現在の数字で言うと、津田学園には2園で9人の満3歳児が在籍している。満3歳児制度とは、3歳になった日から園で受け入れますよという制度なので、4・5・6・7月と経る間に、徐々に該当する園児は増えていく。津田学園では、年度末の3月には、2園で約50人になる。私の幼稚園では3歳未満児は預かっていないが、他の私立幼稚園では、子育て支援として4月から預かっているところもあるので、おそらく100人程度の2歳児が私立幼稚園に通っている。一度、この辺りの数値を調べてほしいと思う。これは、これから議論してくことになる区域設定および確保方策にも大きくかかわってくると思うので、私立幼稚園に通う2歳児に対する教育をどのように加えていくかをしっかりと考えていただきたいと思う。もう1点、9頁の子育て支援センターの状況について、この地域子育て支援事業の定義がよくわからないが、私立・公立・保育所・幼稚園を問わず、すべての園が子育て支援を行っているので、この8か所に限定して数値を出してくるのは適切ではないと思う。

(事務局)

5頁の在籍園児数について、記載の仕方が不十分だった点は反省しているが、改めて説明したい。津田委員にご指摘いただいた私立幼稚園に通う2歳児および満3歳児は、3歳児の欄に含めて表記している。説明が不十分で申し訳なかった。

(事務局)

子育て支援センターの位置づけは、一定の施設でもって、保護者同士が子どもと遊ぶ場の提供、情報提供、相談業務等を行うところとされている。拠点という面では、さらにメニューを作り、講座や家庭訪問をしたりして、より支援が必要な家庭に何らかのアプローチを重点的に行っている。対象としては、子ども全般ではなく、未就園児を対象としている。

(津田委員)

先程申し上げたのは、未就園児を対象とした事業を、おそらくすべての園が実施しているということ。後程使われる資料の中にも子育て支援事業が記載されているが、すべての園でもやっているということを前提に議論すべきだと思う。また、先の在籍園児数について、満3歳児は3歳児に含まれているというご説明だったが、それは適切ではないと思うので訂正した方が良く思う。

(水谷秀史委員)

5頁に関して、5月1日現在における満3歳児はおそらく3歳児に入ると思う。それは学校基本調査の中にも含めているので、きっとそういう統計だと思う。ただ、入れた

からこれで正しい数字という意味で津田委員が言ったのではなく、もう1つの含みがあるのは、誕生日を迎えるごとに段々と増えてくる園児がありますよ、それは100人にも及びますよと、このところの状況にかわるところではないので、当園にも20数人がいるので、全体としてやはり100人くらいはいるんだという認識をするので、ここに3歳児に含まれているから、津田委員が言わんとした隠れているであろう満3歳児の数、3月31日には100人近くになるということを申し添えておく。

(野口委員長)

他の委員の皆さんはご理解いただけたか。事務局はどのように修正するのか。

(事務局)

3歳児から抜き出し、2歳児の枠に修正したものを後日郵送したい。よろしければ、この場で口頭で説明する。436人のうち、2歳児は16人、3歳児は420人が内訳となっている。只今の説明でもって訂正に変えさせていただけると大変ありがたい。

(水谷秀史委員)

3月31日までには増えるので。

(濱内委員)

市立幼稚園はどうして3歳児から預からないのか。

(事務局)

これまで桑名市の幼稚園は、小学校の併設園ということで、いわゆる幼稚園1年と小学校6年の7年教育として、桑名市の特徴として幼稚教育を進めてきた経緯がある。そのような中、保護者のニーズ等を鑑みて、追加実施という形で取り入れてきた経緯があり、園舎自体もそのように整備してきた。

(濱内委員)

過去の経緯というのはわかった。私の周りには、市立幼稚園に3歳から預けたいという声を聞く。

(野口委員長)

子育ても時代とともに形を変えざるを得ない。親と子の関係や、親が子どもを育てる意味とか、本質的な部分の議論をしなければならぬと思う。とりあえずこの部分は報告事項ということで、時間の都合もあるので先に進みたい。

(3) その他

※ 資料に基づき事務局説明

(野口委員長)

現時点での調査票の回収状況はどうか。

(事務局)

段ボールに何箱という数が回収されているが、詳細な数までは把握できていない。

(野口委員長)

調査の主旨に対するご意見等は寄せられているか。

(事務局)

特には頂戴していない。

(野口委員長)

調査票の作成という大変な作業を短期間で行ったわけだが、皆様のご協力に感謝したい。今後も回収を続け、一次集計という形になると思うが、この会議で結果をみなから本質的な議論を含めて審議していきたい。

それでは、教育・保育提供区域の設定についてのグループワークに移りたい。まずは、事務局から説明をお願いします。

3. 議事

(1) 教育・保育提供区域の設定について（グループワーク）

※ 資料に基づき事務局説明

(野口委員長)

国の言い分は、高齢者の場合でいう日常生活圏域、我々が暮らしている圏域で様々な福祉サービスを充実させていきなさいということだが、これまでに色々なものを作ってきて、さらにその上で区域を設定するのはなかなか難しいと思う。どういう地域にどういうものがあると子育てがしやすくなるのかということも含めて、率直な意見交換ができればと思っている。子育てマップを活用しながら、一極集中してしまうと使い勝手が悪くなるので、どういうふうに分散配置しながら、資源を配分していくかの議論になると思う。今回もグループに分かれて、事務局にも参加していただきながら進めていきたい。

(水谷秀史委員)

資料3の8頁について、2号認定の子どもは、幼稚園において預かり保育ができないという設定になっているので、その方向で決めていけば良いか。

(事務局)

2号認定の子どもについて、国では、例えばパート就労している保護者が引き続き幼稚園を利用する場合の手続き方法を検討しており、基本的には、現在保育所に通っていることを前提に考えていただければ良いかと考えている。

(野口委員長)

今のところは、という前提で考えていけば良い。

(水谷秀史委員)

消費税が8%に決まったが、我々に充てられる約7,000億はこの中に入っているか。

(事務局)

8%の使い道は社会保障に充てられることになっており、8%のうち約3,000億円が、保育緊急確保事業として主に待機児童対策に充てられる方針になっている。委員のおっしゃる約7,000億円は、27年度の本格施行時からとなる。

(津田委員)

グループワークの前に、共通認識を持っておいた方が良いことが何点かあると思う。幼稚園の区域設定も議題の1つになると思うが、桑名市では公立幼稚園の再編計画が進められている中、平成30年を目途に11園に、将来的には5園にしていくことが打ち出されているので、それは踏まえた方が良くと思う。加えて、平成27年4月に向けての制度変更は、幼稚園・保育園の先生方ですら十分理解できていない中でグループワークをするのは少々乱暴かなと感じているが、先程出た1号・2号・3号認定の定義をしっかりと認識しながら話をしないと議論が深まらないと思うし、幼稚園で言うならば1号認定に当てはまるが、幼稚園に通う1号認定の中でも、ニーズ調査の結果からみれば2号認定に当てはまる子どもたちがたくさんいることを踏まえた上で議論していく必要があると思う。

(野口委員長)

確かにおっしゃる通りだが、我々は生活者であり、周辺に子どもや保護者が暮らしていて、桑名市といっても合併したまちなのでそれぞれに地域特性があり、そういう意味からすると、個々に集まった皆さんが自分たちの生活圏域の中でどういうことが起こっているのかを、情報交換してみるのも良いのではないかと思います。要するに、今日この場で何かを決めてしまおうと言っている訳ではない。この19人のメンバーで、子ども・子育てに関する桑名市の現状についてどのように捉えており、どういう地域をつくっていくかについて話あっていただきたいと思います。なので、区域設

定をしましょうという話にはならないと思っている。

(水谷秀史委員)

そもそも論を言ってしまって申し訳ないとは思いながらも発言するが、実際にこの会議を眺め渡してみても、うっかりたくさん発言してしまう。というのも、私たちは何年もこれを携えながら、研究を重ねながら情報を積み上げつつ、また政府の動きに追随しながら、ご存じのように政府の動きも大変激しいので、つまり情報が整理されていない部分がとてもたくさんある。その中でのワークショップということを我々は認識すべきなんだろうというふうに認識する。つまり、事務局はとても頭が良いし、きれるので、きっと書類を渡されただけで理解できるのだと思うが、我々は今ここで、1週間、10日、この資料をもらって、さあそれでは区域設定をしますと言われても、何のことでしたというのが正直なところ。私事にかまけて昨日資料をみた。一生懸命読みはしたが、まだまだなかなかわからないところがある。何号認定という所もさることながら、今から区域について話をするにしても、どこからどう切り出したらいいのか本当にわからない。少なくともファシリテーターは、議長さんと密接にその関連・関係をもっておいてもらって、何々について話し合いをします、積み上げをします、というお膳立てというか、事前の話し合いがあってでないと、ちょっと難しいんじゃないかなと感じているので、申し添えをする。

(野口委員長)

実は、私もそのように事務局に申し入れた。今の段階でここまでの議論をするのはとても難しいであろうこと、ましてやニーズ調査の結果も出てきている訳ではないので。ただ、こういう議論をしなければならないということを皆さんに認識していただくのが、今日の一步だと思う。資料を読んでも字面で理解するのが難しいので、ここで少しこういう形で理解するというと同時に、どういうふうに理解していけば良いのかということの道筋も踏まえて、皆で考えていければ良いと思う。委員は19人いるが、19人それぞれが十分に発言できない会議になってしまっただけでは残念だと思うので、後半では、今日の議論を踏まえて、意見交換をするということで事務局をお願いをした。

(水谷秀史委員)

そうすると確認になるが、前回の苦い思いがあり、ワークショップをして、その後議長預かりになり、議長裁決でニーズ調査ができてしまった。今回はそのようなことがないようにお願いしたい。

(野口委員長)

前回もそのようなつもりはなかった。ただ、あれはあくまで調査票をつくる作業だったので、そういう意味ではあれ以上まとめようがなかったことをご理解いただきたい。

(水谷秀史委員)

承知した。

(野口委員長)

それでは、残り時間が30分を切ってしまったが、これからグループワークに移りたい。

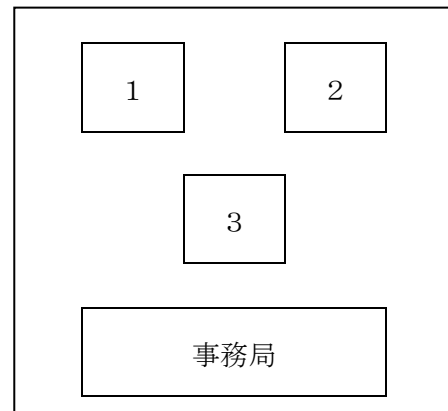
【グループワーク】

委員が車座になるよう席を配置変えし、各グループに分かれて検討を開始。

1 グループ：伊藤香、大橋了子、柴田幸男、
津田浩二、松岡典子、水谷美保

2 グループ：伊藤直和、奥田聖人、下間賢了、
中谷直子、横山悦子

3 グループ：稲垣陽子、加藤隆明、高橋恵美子、
濱内洋孝、水谷秀史
(敬称略、各グループ五十音順)



【各グループでの発言要旨】

■ 1 グループ

- ・幼稚園・保育園でも子育て支援事業に該当することをしているが、それを市民に知らせる機会や情報提供する媒体がない。
- ・転入者等に配布される市の子育て支援のパンフレットは、公立のサービスしか掲載されていない。私立のサービスは、知人から聞くなど口コミに頼っている状況にある。利用者が公立・私立のサービスを自分で比較検討できるよう、すべての情報を提供するべき。
- ・園の統廃合によって自宅から通園先が遠くなったら、通園に時間や出費がかさむことになり、結果的に子育て支援にはならない。
- ・幼稚園の統廃合によって、通園先の幼稚園が遠方になってしまった場合、自宅に近

い保育園に切り替えたがる人が出てくるはず。

- ・一部の園に利用希望者が集中する理由として、駅前などの利便性の良さ、利用料の安さ、生活パターンと合致している、建物がきれいなどがあげられる。
- ・将来的な子どもの数の減少を見越して、利便性に考慮しながら近隣地区を統廃合する必要がある。
- ・廃園にした施設を学童保育、子育て支援センター等に活用してほしい。特に学童保育は、学校ごとに欲しい。
- ・交通手段をしっかりとつければ、地理的な地図で区切る必要はないのではないかと。

■ 2 グループ

- ・資料に載っていない（隠れている）学童保育と類似の事業を行っているところがある。補助金を受けてはいないが、光陽保育園が桑部、在良の子どもを預かっている。利用者ニーズに合わせて、実際は学童保育をされている。市が把握していない所もある。
- ・学童保育は各小学校区に1つずつは欲しい。場所の確保が難しいが。
- ・小学校の敷地内にあるのは、大山田学童保育所コスモスのみ。今提示されている人数よりも、もっと利用ニーズはあると思う。市として増やしていかなければいけない。やはり小学校区に1つは欲しい。
- ・保育園は待機がない状態ではあるが、充足率からいくと地区設定も考えていかなければならない。将来的に増やしていく方向もある。0歳児は予約がないと入れない状態。途中入所の希望があっても、保育士がいらないことにより、すぐには入園できない場合もある。現在はどこかで調整している状態。
- ・陽だまりの丘、多度地域は住宅の関係で子どもが増えている。今後も増える見込み。
- ・具体的なことを考えるにしても、ニーズがわからないと何とも言えない。支援センターは中学校区に1つずつあっても良いと思う。
- ・当保育園には、色々な地域から通って来ている。私立はその園の特性（例、養泉寺はお寺なのでということで選ばれたり、親も代々通ってきた保育園、保育内容など）があるので、それで選ばれているところがある。ただ、全地域へのバス運営はしていない。事故等の責任問題を考えると難しい。行き帰りの道中が親子の関わりの時間になっている。
- ・保育園の役割として、地元の未就園の子どもへの保護者が相談できる施設となること

が理想だが、実際は難しい。市が人員に対する助成をしてくれると良い。施設を建てるよりは身近にできる。補助金を受けたらそういう事業もできる。国はハードルが高い。都市型なので我々には近くない。地域を決めて子育て支援事業をするのではなく、各保育園が独自に支援事業をすることに意味があり、理想である。身近に相談できる場所というのは、近くの保育所・園ではないか。それを出来るのは市である。

- ・自分自身もさんさんルームを利用して、助かった。今の利用数はどうか。
- ・利用者が増えており、年齢も様々。支援が必要な子の利用も増えているので、保育士の対人数だけで預かれないことがある。
- ・支援の必要な子どもの保護者にもリフレッシュが必要。理解はできるが、リフレッシュの人の受け入れも考えてほしい。
- ・一時保育も中学校区に1つあっても良いと思うが、費用のことも考えなくてはいけない。委員も市の財政を考慮し、いかに有効にお金を使うかを考えないといけない。公立幼稚園が3歳児保育を実施できないのは、園再編でもわかるように、利用者が減ってきているため。建物や人件費には多大な費用がかかる。
- ・学童保育所には、たとえ児童が1年生であっても自分で歩いて行かなければならない。大通りを渡るところもあるので、安全確保を考えると、学校区に作って欲しい。
- ・ここまで委員が調査をしていくのか。
- ・学童保育の提供場所として、空き教室の活用はどうか。学校併設だと子どもの無理な移動がないし、各地域にある。指導員不足は検討する必要があるが。
- ・学校の空き教室を有効に利用すると良いと思う。一時保育もそこを利用してはどうか。

■ 3 グループ

- ・保育の現場を預かる立場としては、長時間保育よりもできれば親が迎えに行ける状況が作れればと考えている。
- ・保護者の中には、迎えが最優先ではなく、買物をして食事を作ってから迎えにくる人もおり、やはり子どもを一番に迎えに来るといった姿勢を子どもに見せてあげてほしい。
- ・現実には、仕事があつて忙しいことは承知しているが、だんだん子どもが帰って行き、最後の1人になる子どももいるわけで、保護者にもその点を分かってほしい

- ・保護者としては、延長保育は非常に助かる。教育者の視点と保護者の視点がある。
- ・今回、区域設定に関して、なぜ必要で、何を決めるのかが分からない
- ・区域設定に関して、私立幼稚園の立場としては、全域にバスを走らせており、区域設定は必要ないと考えている。区域設定により教育活動が脅かされることも心配している。
- ・区域を設定するにあたって、公立は細分化、私立は全域として考えられないか
- ・園再編の区割りは強引な点もあったので、今回はそのような事のないようにしてほしい。
- ・内容によっては地域ごとも考えられるため、13事業を一緒の区域設定で行う訳ではない
- ・事業者、保護者、行政の考えをすり合わせるのはとても難しく、三者が少しずつ歩み寄って良くなる方向を考えられないか。
- ・桑名は車の所有率が高く、長島の講座に旧桑名から半分ほど来ている。全域設定としても良い面もあるが、車を運転しない人には区分が必要な点もある。
- ・合併してかなり経つが、旧桑名はバス無し、多度は無料バス、長島は有料バスと、同じ税金を納めても格差が生じている。
- ・サービスも大切であるが、市の財政状況にもよる。破綻しては元も子もない
- ・長島であれば幼稚園を1か所にする必要はないのではないかと。無理に1つにするからバスを走らせる話になる。
- ・待機児童を出さないためにも、公立幼稚園が3歳から預かり、延長保育を行い、夏休みも実施すれば、保育園から幼稚園に移る方もみえるのではないかと。現在、希望どおり保育園に入れられない場合もあるので、少しでも緩和されるのではないかと。
- ・園再編計画で幼稚園が減って経費は削減されるだろうか。人件費はそのままであり、変わらないのではないかと。
- ・子育てマップに関して、分かりづらいので、点だけにするとか、種類ごとに作成する等した方が分かりやすいのではないかと。
- ・桑名市のサービスを利用して見て、サービスが良すぎて、ここまでしなくてもという事までやっていないだろうか。保護者のわがままに関して、教育者や行政は声を出しても良いのではないかと。
- ・支援センターの保護者をもみても、子どもとの触れ合いや相談よりも親同志のおしゃべりに夢中になるなど、子育てできない親が増えている。

- ・保護者、幼稚園、保育園、行政など多くの視点がある中で、地域性を見ていき、どこに問題があるのかを考えていくことが大切ではないか。
- ・今までこの会議に関して疑問があったのだが、子どもや親が子育てしやすい方法を考えていく会議であるのに、なぜ議論が進まないのだろうか。利用する人の幸せを考えた議論をすべきであるのに、そのような議論になっていない。
- ・それぞれの視点がある。あらゆる方向から考えないといけない。
- ・私立幼稚園の立場で言わせてもらうなら「そっとしておいてほしい」。
- ・保護者の立場からは「公立幼稚園で3歳児保育をしてほしい。保育時間の延長もしてほしい」。

(野口委員長)

今回は、調査の結果を受けて、子育てをどのようにしたら良いのかを、もう少し具体的に議論したい。19人の会議を運営するのは結構大変で、これくらいのグループの方が話しやすいと思う。全体で説明しつつ、皆さんの意見を聞きながらまとめていくという方向にしないと、ちょっと難しい気がしている。1人が1分話をすると、全体で19分かかってしまう。どういうふうに会議を進めていくかは、改めて事務局と検討したい。

4. その他

※ 次回の日程調整等について事務局説明

(野口委員長)

今日も終了予定時刻を30分ほどオーバーしている。次回の会議は2時間半を予定しておいた方が無難だと思う。本日はありがとうございました。

5. 閉会